

H/A

M. 50

No. 1.3.2.2 解

Date 63.12.5

12.12 補
12.15

造波抵抗の極小値問題

概要

1. ミツチエル 船型

2. 球 船型, マイク-フォー4型

3. 浸水体

4. 細長体

5. 圧力分布

6. 平板滑走面

7. 飛沫抵抗

8. 矩形圧力面の極値問題

頁
1
2

6

13

14

15

18-19

20-23

24-26

概要

本覚書では 細長船、薄・船^のの数学的模型により、
高速における造波抵抗の予想しうる最低値の
見当をつけようとするものである。

というのは造波抵抗の最小値は0であるが、それに
対応する特異点では負になって半幅が無限になる等の
不都合が出て来るので、現実的な船型として可能な
ものについては造波抵抗がかなり大きくなるので、実際
に数値計算に探索するより仕方がない筈である。

さて高速とは、一般 フレード 数 0.5 以上 と言う意味
とするが、實際上 ラスト・ハムフ (普通は フレード 数 0.6 位)
より低速側と高速側では 傾向的に異なるので
もっと正確には ラスト・ハムフ より高速側 と言う方が
よいであろうし、また そこに 重点をおいて考える事になる。
また フレード 数 1 以上で $1/8$ が大きいと 摩擦抵抗が
大変大きくなるので 経済性を追求する船として
は 困難になって来るので 速度の上限も 大体
その辺 で 止める事にする。

1. 薄い船の造波抵抗

薄い船の近似では半幅曲線が $\eta(x, z)$ で表わされる
船の造波抵抗 R は次式で与えられる。

$$R = \frac{4}{\pi} \rho g K_0^3 \int_0^{\frac{\pi}{2}} |\bar{H}(K_0 \sec \theta, \theta)|^2 \sec^5 \theta d\theta, \quad (1.1)$$

$K_0 = g/V^2$

$$\bar{H}(K, \theta) = \int_{-T}^0 \int_{-l}^l \eta(x, z) e^{iKz - iKx \cos \theta} dx dz, \quad (1.2)$$

l は半船長, T は吃水, 但し 以下 $l=1$, 船速 $V=1$ とし計算する。

船型近似排水量を ∇ とすると

$$\nabla = 2 \int_{-T}^0 \int_{-l}^l \eta(x, z) dx dz, \quad (1.3)$$

さて一般的に η は次の形に表わす事にしよう。

$$\eta(x, z) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n(z) \frac{\cosh n\phi}{\sinh n\phi}, \quad x = -\cosh \phi, \quad (1.4)$$

なおよく知られているように前後対称性は造波抵抗を激増させるので、以下そのような場合はあきり考慮を方針とする。
(また計算は独立に行つて加え合はせればよい)

を以下とせず

$$\nabla = 2\pi \int_{-T}^0 a_0(z) dz, \quad (1.5)$$

高速の場合 一般に 船型の細かい変化は造波抵抗にあまり影響しないので 変分問題の副条件としては与えられたフルード数に対して 排水量に限る事とする。

$a_n(z)$ は 吃水方向の半幅の変化 つまり 肋骨線の横座標を表わすが、この変化に対し 振幅関数の変化は 単純であるので あまり大きく変化させる事はないから 次のように とするとし 必要に応じて、さらに 何項か追加すればよからう。

$$a_n(z) = \frac{1}{T} a_0^{(n)} + \frac{a_1^{(n)}}{T} \left(\frac{1}{2} + \frac{z}{T} \right), \quad (1.6)$$

$$\int_{-T}^0 a_n(z) dz = a_0^{(n)}, \quad (1.7)$$

よって (1.5) は $\nabla = 2\pi a_0^{(0)}$ あるいは $\frac{\nabla}{L^3} \equiv \delta = \frac{2\pi}{L^3} a_0^{(0)}$, (1.8)

L は 船長 で 今は 2 とする。

さて 次のように 規格化しよう。

$$\eta^*(x, z) = \frac{1}{a_0^{(0)}} \eta(x, z) = \frac{1}{T} \sum_n \left[a_0^{(n)} + C_1^{(n)} \left(\frac{1}{2} + \frac{z}{T} \right) \right] \frac{\cosh \phi}{\sinh \phi},$$

$$C_m^{(n)} = \frac{a_m^{(n)}}{a_0^{(0)}}, \quad C_0^{(0)} = 1,$$

(1.9)

$$\bar{H}^*(k, \theta) = \int_{-T}^0 \int_{-L}^L \psi^*(x, z) e^{ikz - i k x \cos \theta} dx dz, \quad (1.10)$$

さらに (1.1) は

$$\gamma = \frac{R}{\rho g V \left(\frac{\nabla \cdot \mathbf{u}}{L} \right)^2} = \frac{2k_0^3}{\pi^3} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |\bar{H}^*|^2 \sin \theta d\theta, \quad (1.11)$$

より

$$\int_0^{\pi} \cos n\phi e^{-ik \cos \phi \cos \theta} d\phi = \pi (-i)^n J_n(k \cos \theta), \quad (1.12)$$

$$\frac{1}{\pi} \int_{-T}^0 e^{kz} dz = \frac{1}{k} (1 - e^{-kT}) = \frac{1}{k} f_0(kT), \quad (1.13)$$

$$\begin{aligned} \int_{-T}^0 e^{kz} \left(\frac{1}{2} + \frac{z}{T} \right) dz &= \frac{1}{k} \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{2} e^{-kT} \right) - \frac{1}{kT} \int_{-T}^0 e^{kz} dz \\ &= \frac{1}{k} \left[\frac{1}{2} + \frac{1}{2} e^{-kT} - \frac{1}{kT} (1 - e^{-kT}) \right] \\ &= \frac{1}{k} \left[\frac{1}{2} - \frac{1}{kT} + \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{kT} \right) e^{-kT} \right] = \frac{f_1(kT)}{k}, \quad (1.14) \end{aligned}$$

より

$$\bar{H}^*(k, \theta) = \frac{\pi}{kT} \sum_n \left[C_0^{(0)} f_0(kT) + C_1^{(1)} f_1(kT) \right] (-i)^n J_n(k \cos \theta) \quad (1.15)$$

$$\therefore \gamma = \sum_{m, \mu} \sum_{n, \nu=0}^{\infty} C_m^{(m)} C_{\mu}^{(\nu)} I_{m, \mu}^{n, \nu}, \quad (1.16)$$

$$I_{m, \mu}^{n, \nu} = \frac{2k_0^3 (-i)^{n+\nu}}{\pi T^2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} f_m(k_0 T \cos \theta) f_{\mu}(k_0 T \cos \theta) J_n(k_0 T \cos \theta) J_{\nu}(k_0 T \cos \theta) \times \sin \theta d\theta,$$

な対称性から η, ν は 共に偶数のみ, 奇数のみの時だけ
値をとり, 他は 0 となる。従って 虚数値をとる事はない。

この積分を計算において (11.16) を $\mathcal{L}_0^{(10)} = 1$ の下に
極小値問題をとけばよい。

そのような解の内 $\eta(x, z)$ が負値をとるものは捨てねばならない。

2. マイヤ-ワーム型, 球船着型

前節のように直接 η を扱うかわりに二次式で表わされ
補助関数 σ で考えてみよう。

$$\eta(x, z) = \left(\frac{\partial}{\partial z} - \frac{1}{k_0} \frac{\partial^2}{\partial x^2} \right) \sigma(x, z), \quad (2.1)$$

これは z を時間 (上向きに z) とみなすと一次元の

熱伝導の方程式で σ は温度, η は熱源である。

従って

よく知られているように与えられた初期条件, 境界条件

によって σ は一意的に定まるから, η のかわりに σ で

考えても一般性を損わない。

まず排小量は

$$\frac{\nabla}{2} = \int_{-T}^0 \int_{-1}^1 \eta(x, z) dx dz = \int_{-1}^1 [\sigma(x, 0) - \sigma(x, -T)] dx \\ - \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) - \sigma_x(-1, z)] dz, \quad (2.2)$$

ユツ42) 関数は

$$\bar{H}(R, \theta) = \int_{-T}^0 \int_{-1}^1 \eta(x, z) e^{kz - ipx} dx dz, \quad p = k_0 \cos \theta, \quad (2.3) \\ R \rightarrow k_0 R \cos \theta, \\ = \int_{-1}^1 [\sigma(x, 0) e^{-ipx} + \sigma(x, -T) e^{-kT - ipx}] dx \\ - \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) e^{-ip} - \sigma_x(-1, z) e^{ip}] e^{kz} dz \\ + \frac{ip}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma(1, z) e^{-ip} - \sigma(-1, z) e^{ip}] e^{kz} dz, \quad (2.3) \\ k = k_0 \cos^2 \theta, \quad p = k_0 R \cos \theta$$

となって、スラット積分がなくなる点がいまわりのであるが、このように
(極限問題の)
では任意係数の数は前節と略等である。

そこで、^{後述}境界条件と初期条件を次のように定めよう。

$$\sigma(\pm 1, z) = 0, \quad \sigma(x, -T) = 0, \quad (2.4)$$

すると

$$\frac{\nabla}{2} = \int_{-1}^1 \sigma(x, 0) dx - \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) - \sigma_x(-1, z)] dz, \quad (2.5)$$

$$\begin{aligned} \tilde{H}(k_0, \kappa, i0, \theta) = & \int_{-1}^1 \sigma(x, 0) e^{-ipx} dx \\ & - \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) e^{ip} - \sigma_x(-1, z) e^{ip}] e^{kz} dz, \quad (2.6) \end{aligned}$$

さらに

$$\sigma(x, z) = (1-x^2)(z+T), \quad (2.7)$$

とすると

$$\psi(x, z) = (1-x^2) + \frac{2x}{k_0}(z+T), \quad (2.8)$$

となり、V 肋骨船型あるいはマイヤー・フォーム船型
のような船型を表わしていると考えられるので、
以下 マイヤー・フォーム型と名づけよう。

この型では船首尾附近で σ_{xx} 従って ψ_x が正
にならんと ψ が負になるので、 ψ_{xx} つまり曲率は船首
尾附近で負、つまり、凹でなければならぬ。
(外側に)

もう一つの簡単な場合は、

$$\sigma(\pm 1, z) = 0, \quad \sigma(x, 0) = 0, \quad (2.9)$$

であるから

$$\frac{\nabla}{2} = - \int_{-1}^1 \sigma(x, -T) dx - \frac{1}{K_0} \int_{-T}^0 [\tilde{\sigma}_x(1, z) - \sigma_x(-1, z)] dz, \quad (2.10)$$

$$F(K_0, \alpha C(\theta, \theta)) = - \int_{-1}^1 \sigma(x, -T) e^{-kT - ipx} dx \\ - \frac{1}{K_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) e^{-ip} - \sigma_x(-1, z) e^{ip}] e^{kz} dz, \quad (2.10)$$

となる。

簡単な例として

$$\sigma(x, z) = (1-x^2)^2 z, \quad (2.11)$$

$$\text{とおくと} \quad \tilde{\sigma}(x, z) = (1-x^2)^2 + \frac{4(3x^2-1)}{K_0} z, \quad (2.12)$$

のようになり、球船首船型を代表していると考えられるので以下 球船首型と名づけよう。

前者と反対に σ_{xx} は船首尾で正となるからと
 が負になるので具合が悪く、従って水線
 形状は変曲点を持ち、球船首船型又は
 ユーテウィッチ・フォームの特徴を有する事になる。

これらの2つの型は船型の類型の内では

代表的なものがあるから、これらについて極値問題を
考えてみる事にしよう。

なお (2.11), (2.12) の例では $\sigma_x(\pm 1, z) = 0$ となっているから

この時は (2.10) からわかるように $z = -T$ にある没水体と

造波抵抗は等しくなり著者等が前に没水体型となづけ

たものに等しいから、一般には σ は有限でありうるから

ここではそういう場合を考えるものとし、没水体については
節を変えて取扱う。

また簡単のため以下船型は前後対称の場合のみ考える。

1) マイヤーフォード型

$$\sigma_{xx}(x, z) = - \sum_{n=0}^{\infty} a_n(z) \frac{\cos n\phi}{n\phi}, \quad x = -\cos\phi, \quad (2.13)$$

$$\sigma_x(x, z) = a_0(z) \left(\frac{\pi}{2} - \phi \right) - \sum_{n=2}^{\infty} \frac{a_n(z)}{n} \sin n\phi, \quad (2.14)$$

$$\begin{aligned} \sigma(x, z) &= a_0(z) \left\{ \frac{\pi}{2} - \sin\phi - \left(\frac{\pi}{2} - \phi \right) \cos\phi \right\} \\ &\quad + \frac{1}{2} \sum_{n=2}^{\infty} \frac{a_n(z)}{n} \left\{ \frac{\sin(n+1)\phi}{n-1} - \frac{\sin(n+1)\phi}{n+1} \right\}, \quad (2.15) \end{aligned}$$

$\sin\phi - \frac{\sin 3\phi}{3} = \frac{4}{3} \sin^3\phi$

対称性を仮定して和記号は $n=2$ からとれているから

$n=1$ からとすると $\sigma(\pm 1, z) \neq 0$ となるので注意。

$$\nabla = \frac{\pi}{2} a_0(0) + \frac{2\pi}{k_0} \int_{-T}^0 a_0(z) dz, \quad (2.16)$$

$$F(\omega, p, 0, 0) = \frac{\omega^2 b}{k_0} \left[- \int_{-T}^1 \rho_{xx}(x, 0) e^{-ipx} dx + 2 \omega p \int_{-T}^0 \rho_{xz}(1, z) e^{kz} dz \right] \quad (2.17)$$

13)

$$a_0(z) = a_0^0 \left(\frac{z}{T} + 1 \right) + a_1^0 \frac{z}{2T} \left(\frac{z}{T} + 1 \right) \quad (2.18)$$

$$\frac{d}{dz} a_0(z) = \frac{1}{T} a_0^0 + \frac{a_1^0}{2T} \left[\frac{2z}{T} + 1 \right]$$

$$\int_{-T}^0 a_0(z) dz = \frac{T}{2} a_0^0 - \frac{T}{8} a_1^0, \quad a_0(0) = a_0^0$$

2.18.12

$$\nabla = \frac{\pi}{2} a_0^0 \left(1 + \frac{2T}{k_0} \right) - \frac{\pi T}{8 k_0} a_1^0; \quad (2.19)$$

$$\int_{-T}^0 \rho_{xz}(1, z) e^{kz} dz = - \frac{\pi}{2} \int_{-T}^0 \frac{d a_0(z)}{dz} e^{kz} dz = - \frac{\pi}{2T} \int_{-T}^0 e^{kz} \left[a_0^0 + \frac{a_1^0}{2} \left(1 + \frac{2z}{T} \right) \right] dz$$

$$= - \frac{\pi}{2 k T} \left[a_0^0 f_0(kT) + \frac{1}{2} a_1^0 f_1(kT) \right] \quad (2.20)$$

$$f_0(kT) = 1 - e^{-kT} = k \int_{-T}^0 e^{kz} dz,$$

$$f_1(kT) = \frac{k}{2} \int_{-T}^0 e^{kz} \left\{ \frac{2z}{T} + 1 \right\} dz$$

(2.21)

$$\begin{aligned} \overline{H}(k_0 \sec \theta, \theta) &= \frac{\cos^2 \theta}{K_0^2} \left[\pi \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n}(0) (-1)^n J_{2n}(k_0 \sec \theta) \right. \\ &\quad \left. - \frac{\pi}{2kT} \cos \theta \left\{ a_0^0 f_0(kT) + a_1^0 f_1(kT) \right\} \right] \quad (2.22) \\ &= \frac{2 \cos^2 \theta \cdot V}{\pi K_0^2} \left[\sum_{n=0}^{\infty} C_{2n} (-1)^n J_{2n}(k_0 \sec \theta) \right. \\ &\quad \left. - \frac{\cos \theta}{2kT} \left\{ C_0^0 f_0(kT) + C_1^0 f_1(kT) \right\} \right] \end{aligned}$$

$$C_{2n} = \frac{a_{2n}(0)}{\frac{2}{\pi} V}, \quad \left(a_0^0 = a_0(0), \quad C_0^0 = \frac{a_1^0}{\frac{2}{\pi} V} \right), \quad (2.23)$$

$$C_0 \equiv C_0^0$$

$$C_0^0 \left(1 + \frac{1}{K_0} \right) - \frac{1}{2K_0} C_1^0 = 1, \quad (2.24)$$

$$r = \frac{R}{\rho \sqrt{\frac{V}{L^3}}} = \frac{1.28}{\pi K_0} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |\overline{H}^*|^2 \sec \theta d\theta, \quad (2.25)$$

$$\begin{aligned} \overline{H}^* &= \sum_{n=0}^{\infty} C_{2n} (-1)^n J_{2n}(k_0 \sec \theta) \\ &\quad - \frac{\cos^2 \theta}{2k_0 T} \left\{ C_0^0 f_0(k_0 T \sec \theta) + C_1^0 f_1(k_0 T \sec \theta) \right\} \cos(k_0 \sec \theta), \quad (2.26) \\ &\quad C_0 \equiv C_0^0. \end{aligned}$$

(2.25) を (2.24) の副条件で 式 (2.26) を用いて計算する。

$$\left(\frac{1}{2} \sqrt{\frac{\pi}{K_0^2}} \cos \theta \right)^2$$

ii) 球形共振型

 $\sigma(x)$ は (2.15) で与えられるものとする。(2.26)

従って

$$\nabla = -\frac{\pi}{2} a_0(-T) + \frac{2\pi}{K_0} \int_{-T}^0 a_0(z) dz, \quad (2.27)$$

ここで

$$a_0(z) = a_0^0 \frac{z}{T} + a_1^0 \frac{z}{2T} \left(\frac{z}{T} + 1 \right), \quad (2.28)$$

と仮定

$$\left. \begin{aligned} a_0(-T) &= -a_0^0, & -1 \frac{T^3}{3} &= -\frac{T^3}{3} \\ \int_{-T}^0 a_0(z) dz &= -\frac{a_0^0}{2} T + \frac{a_1^0 \cdot T}{12} \end{aligned} \right\} (2.29)$$

$$\therefore \nabla = \frac{\pi}{2} a_0^0 - \frac{\pi T}{6K_0} a_1^0, \quad (2.30)$$

$$\begin{aligned} F(K_0 \alpha e^{i\theta}, \theta) &= \frac{\omega^2 \theta}{K_0^2} \left[\int_{-1}^1 \sigma_{xx}(x, -T) e^{-i\theta x} dx + 2 \cos \theta \int_{-T}^0 \sigma_{xz}(1, z) e^{i\theta z} dz \right], \\ &= \frac{\omega^2 \theta}{K_0^2} \left[-\pi \sum_n a_{2n}(-T) (-1)^n J_{2n}(\rho) + \frac{2 \cos \theta}{K_0 T} \left\{ a_0^0 f_0(K_0 T) + a_1^0 f_1(K_0 T) \right\} \right], \\ &= \frac{2V \omega^2 \theta}{K_0^2} \left[\underbrace{e^{-K_0 T} \sum_n c_{2n}(-T) J_{2n}(\rho)}_{F^*} + \frac{2 \cos \theta}{K_0 T} \left\{ c_0^0 f_0(K_0 T) + c_1^0 f_1(K_0 T) \right\} \right], \end{aligned} \quad (2.31)$$

$$c_{2n} = -\frac{a_{2n}(-T)}{\frac{2}{\pi} V}, \quad c_0^0 \equiv c_0, \quad c_1^0 = \frac{a_1^0}{\frac{2}{\pi} V}, \quad (2.32)$$

$$r = \frac{R}{\rho^4 \sigma(\Sigma^2)} = \frac{1}{\pi K_0} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F^*|^2 \sin \theta d\theta, \quad (2.33)$$

則条件

$$1 = c_0 - \frac{T}{3K_0} c_1^0, \quad (2.34)$$

3. 没水体

$z = -T$ の x 軸上を運動して進む没水体を考慮しよう。その船を近似的に断面積 $A(x)$ に等しいとする。

$$A(x) = \frac{\nabla}{\pi \sin \theta} \sum_{n=0}^{\infty} a_n \cosh n\theta \quad (a_0 = 1) \quad (3.1)$$

とすると

$$r = \frac{R}{\rho g \nabla \left(\frac{\nabla}{L}\right)^3} = \frac{8K_0^3}{\pi} \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-2K_0 T \sec \theta} |F^*|^2 \sec \theta d\theta, \quad (3.2)$$

$$F^* = \sum_{n=0}^{\infty} (-i)^n a_n J_n(K_0 \sec \theta), \quad (3.3)$$

ここでは石井の半没水船型のように、これに先の尖った strut (or sail) を加えると進波抵抗を小さくすることが出来るが高速では干渉効果は小さくあまり効果が期待出来ない。

この干渉効果は没水体の波の位相と strut のそれとか K_0 の大きい所で互に逆になる所に起因し、高速ではそれが期待出来ない事になる。

1節では一般的な場合を考慮するのでこの場合はそれも含めるものと考えて扱わない。

またこれによる没水型船型は高速では船首にくびれが出来て現実的船型にならない。

4. 細長船

前節の没水体から没水体型の水面電通船型を得る試みは体速では可能であるが、その高次特異性の事、高速では現実的な船型が得られない。

この高次特異性をとけるには $A(\pm 1) = A'(\pm 1) = 0$ とすればよく、この場合 $T \rightarrow 0$ とすると所謂細長船が得られる。

$$A(x) = \frac{\nabla}{\pi} \sum_{n=2}^{\infty} \frac{a_n}{2n} \left\{ \frac{\sin(n-1)\phi}{n-1} - \frac{\sin(n+1)\phi}{n+1} \right\}, \quad (4.1)$$

$$A''(x) = \frac{\nabla}{\pi} \sum_{n=2}^{\infty} a_n \frac{\cos n\phi}{\sin \phi}, \quad (4.2)$$

$$\nabla = \int_{-1}^1 A(x) dx = \frac{\nabla}{8} \cdot a_2, \quad a_2 = 8, \quad (4.3)$$

$$\gamma = \frac{8}{TK_0} \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-2k_0 T \sec \theta} \frac{1}{H^{\frac{1}{2}}} \sec \theta d\theta, \quad (4.4)$$

$$H^{\frac{1}{2}} = \sum_{n=2}^{\infty} (-i)^n a_n J_n(k_0 \sec \theta), \quad (4.5)$$

この最適解は高速で前節のものの略々倍になる。(又 $T=0$ で γ は有限である)

これは又 2 節の場合によく似ているが、やはり 2 節の場合の方が抵抗が小さく存在と考えられる。

5. 圧力分布

前節迄の所謂排水量型船型に対しては所謂線積分項の問題(高次より高次の微少量と考えられるが)とか船型と特異点の対応が線型理論的には簡単だが、もう少し精密にするために流線追跡をしようとすると水面附近の流線をどう採ればよいかなど理論的な問題点が浮く。

特に水面を貫通するのであるから、水面変位は大きくなり、それがよく観察されるように砕けて飛沫となり抵抗成分となり得ると考えられるがそれを予測する理論が今の所見当らない。

その点で圧力分布は線型理論の範囲内で Consistent な理論模型を提供し、船型の計算も可能であり、飛沫抵抗も予測する。また飛沫の出ない船型も容易に求められる。

今回の結果では飛沫の出ない船型は動的浮力は小さく、また圧力分布面の形状に矩形がよく、中は大きい方が抵抗が小さい。

E_0 を L , B の 矩形 面 に 分布 する 圧 力 を
($L=2$)

$$p(x, y) = A \sum_{n, m} a_{nm} \sin n\phi \sin m\psi, \quad (5.1)$$

($x = -\frac{L}{2} \cos \phi, \quad y = -\frac{B}{2} \cos \psi$)

と お こ う。

$$p g V = \iint p(x, y) dx dy = \frac{\pi^2}{16} L B \cdot A a_{11} \quad (5.2)$$

と な る か ら

$$a_{11} = 1$$

と お こ う

$$A = \frac{16 p g V}{\pi^2 L \cdot B}, \quad (5.2)$$

逆 変 換 は

$$R = \frac{K_0^2}{\pi p U^2} \int_0^\pi |F|^2 \sec \theta d\theta, \quad (5.3)$$

$$\bar{H} = \iint p(x, y) e^{i K_0 (x \cos \theta + y \sin \theta) \sec \theta} dx dy, \quad (5.4)$$

と お こ う

$$\int_0^\pi e^{i z \cos \phi} \sin n\phi \sin m\psi d\phi = \frac{\pi n}{z} i^{n-1} J_n(z), \quad (5.5)$$

と お こ う

$$\bar{H} = \frac{\pi^2 A \cos^3 \theta}{K_0^2 \sin \theta} \sum_{n, m} a_{nm} z^{1+n-2} J_n(K_0 \sec \theta) J_m(K_0 \sec \theta \sin \theta), \quad (5.6)$$

$\lambda = B/L$

$$\frac{\pi^2 A}{K_0^2} \times \frac{1}{\lambda} = \frac{4 p g V}{\lambda K_0^2}$$

$$r \approx \frac{R}{PSP\left(\frac{V}{L^3}\right)} = \frac{128\pi}{K_0 R^2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F^*|^2 \frac{\cos\theta}{\sin^2\theta} d\theta, \quad (5.7)$$

$$F^* \approx - \sum_{n,m} i^{n+m-2} a_{nm} J_n(K_0 R \sin\theta) J_m(K_0 \lambda \sin\theta \sin\theta), \quad (5.8)$$

圧力分布では 幅方向の分布形状は 重要で逆品型
 とすると干渉効果により 発散はが小さくなるよ
 である。

6. 平板滑走面

滑走面の性能は 矩形平板の場合が最も良いと
されており又 Savitsky の有名な実験式があるので
少し記して見よう。

Savitsky によれば 矩形平板の揚力係数は

$$C_L = \frac{\rho g V}{\frac{1}{2} \rho V^2 B^2} = \left(\frac{180 \alpha}{\pi} \right)^{1/4} \left[\frac{10/20}{\sqrt{\lambda}} + \frac{0.055}{\lambda^{5/4}} \frac{g B}{V^2} \right], \quad (6.1)$$

$\lambda = B/L$ (この式では λ はこの逆数となっている)
 α : in rad.

この右辺の 1 項が 動的浮力で、2 項が 静的
浮力の項である。

今 $F = V \sqrt{g L}$ として α の値をとると

$$\frac{\text{動的浮力}}{\text{静的浮力}} = 2.18 \lambda F^2, \quad \dots \dots (6.2)$$

となるので 例へば $\lambda = 0.2$ とすると $F \geq 1.51$ で

動的浮力が大きくなる事になる。

つまり λ の小さい時には 余程 F が大きくなしないと
動的浮力はあまり大きくないと考えられる。

さて (6.1) より $\checkmark$ $R_p/P_F = \alpha$ であるから、

$$r = \frac{R_p}{P_F \left(\frac{R}{L} \right)} = \frac{1.826}{\delta^{0.1} [\sqrt{1 + (4.583 + 1F^2)}]^{1/4}} \quad (6.5)$$

R_p : 圧力抵抗

となる。

少し数値を計算してみよう

				飛沫なし船型 (L 開きの船)	
				r (矩形面)	V (楕円面)
.005	0.2	.7071	10.95	3.79	9.14
		1.0	9.43	4.65	23.41
	0.4	.7071	6.88	2.57	3.73
		1.0	5.41	1.97	4.74

となる。

理論計算値の方がもう一つ信頼性がよく判らないので、今の所でこれから飛沫なし船型が良いと断定は(かねる)。

また浸水表面は飛沫なしの方がずっと大きくなるので、この点も考えると一層悲観的になる。

しかし飛沫なし船型は深い胴部をもつので波浪中の性能は良いと考えられる。

7. 飛沫抵抗

高速では丸座によって示されたように 船のまわりの
流れは 翼の場合に近づき、造は抵抗は誘導
抵抗に近づく。

しかし、^丸抵抗については 翼の場合 ^{粘性を考慮しなければ} "誘導抵抗の2倍"
あるいは "細長量 ^(平板) では 近似的に

$$\frac{R_i}{W} = \frac{\alpha}{2} \quad (7.1)$$

R_i : 誘導抵抗, W : 排水量, α : 迎え角

と与えられるが、滑走板では単純に

$$\frac{R}{W} = \alpha, \quad (7.2)$$

この差は、翼では 前縁 吸力力が働くけれど、滑走
板ではそれがなく 逆に 飛沫となって系外に出て行き
運動量損失^に抵抗となると考えられる。

それ故 (7.2) と (7.1) の差は 飛沫抵抗 と考えてよい。

即ち 飛沫抵抗 R_s は今の場合

$$\frac{R_s}{W} = \frac{R}{W} - \frac{R_i}{W} = \alpha \quad (7.3)$$

となって 全抵抗 R の 半分を占める事になる。

一方 短方形 平板 の場合は 近似的に
^{今の場合}

$$W = \frac{\pi}{4} \rho B^2 V^2 \alpha, \quad \alpha' = \frac{4W}{\pi \rho B^2 V^2} = \frac{4\delta}{\pi \lambda F^2}, \quad (7.4)$$

$$\delta = V/L^3, \quad \lambda = B/L, \quad F = V/\sqrt{g}L$$

と書きかえらるから (7.2) に代入すると

$$\gamma = \frac{R}{W \cdot \delta} = \frac{4}{\pi \lambda F^2}, \quad (7.5)$$

となるが、これは (6.8) に対応する式である。

数値的にはかなりの差があるが定性的にはよく似ており
て丸座にすれば"渦糸抵抗"は次式で与えられる。

$$R_S^M = \frac{\pi L}{2 \rho V^2} \int_{-\frac{B}{2}}^{\frac{B}{2}} \{ \bar{p}_0(y) \}^2 dy, \quad (7.6)$$

$$\text{2D L} \quad \bar{p}_0(y) = \frac{1}{\pi} \int_{-\frac{L}{2}}^{\frac{L}{2}} p(x, y) dx, \quad (7.7)$$

$$\text{然し今は} \quad R_S = \frac{\pi L}{8 \rho V^2} \int_{-\frac{B}{2}}^{\frac{B}{2}} \sigma^2(y) dy, \quad (7.6')$$

$$\text{と3Dの} \quad p(x, y) = A \sum_n \sum_m \frac{a_{nm} \cos n\phi \sin m\phi}{\sin \phi}, \quad (7.8)$$

$$x = -\frac{L}{2} \cos \phi, \quad y = -\frac{B}{2} \cos \phi,$$

とおくと

$$\sigma(y) = A \sum_{n, m} (-1)^n a_{nm} \sin m\phi, \quad (7.9)$$

$$\rho g V = \iint p(x, y) dx dy = \frac{LB}{8} \pi^2 A a_0,$$

以下 $a_0 = 1$ とおくとすると

$$A = \frac{8 \rho g V}{\pi^2 L B}, \quad (7.10)$$

82.

$$\int_0^\pi \sin n\varphi \sin m\varphi \sin \varphi d\varphi = \frac{1}{2} \int_0^\pi [\cos(n-m)\varphi - \cos(n+m)\varphi] \sin \varphi d\varphi$$

$$= \frac{1}{4} \int_0^\pi [\sin(n-m+1)\varphi - \sin(n-m-1)\varphi - \sin(n+m+1)\varphi + \sin(n+m-1)\varphi] d\varphi$$

$$= 0 \quad \text{for } n-m: \text{ odd.}$$

$$= \frac{1}{(n+m)^2-1} - \frac{1}{(n-m)^2-1} \quad \text{for } n-m: \text{ even}$$

$$= \frac{4}{3} \quad \text{for } n=m=1, \quad \frac{-2}{15} \quad \text{for } n=3, m=1, \quad \frac{36}{35} \quad \text{for } n=m=3.$$

と左の2'

$$R_s = \frac{\pi L B}{16 P V^2} A^2 \sum_n b_n b_m \int_0^\pi \sin n\varphi \sin m\varphi \sin \varphi d\varphi$$

$$= \frac{4 W \delta}{\pi^3 \lambda F^2} \sum \left(\downarrow \right), \quad b_m = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{nm},$$

$$\gamma_s = \frac{R_s}{W \delta} = \frac{16}{\pi^3 \lambda F^2} \left[\frac{4}{3} a_1^2 - \frac{4}{15} a_1 a_3 + \frac{36}{35} a_3^2 + \dots \right], \quad (17.12)$$

$$= \frac{64}{3 \pi^3 \lambda F^2} \left[1 - \frac{1}{5} a_3 + \frac{27}{35} a_3^2 + \dots \right], \quad (\because a_1 = 1)$$

$$\left(\frac{64}{3 \pi^3} = 0.6880 \right)$$

と成って、飛沫抵抗は a_{0m} にのみ関係し、また a_{01} 以外の項、つまり y 方向の揚力分布を変化させてもあまり減少することなく、どちらがと云うとこの値の或1項より増えると考えられる。つまり殆ど排水量と λ と F で決まってしまう。

そして実際 19頁の表 74リ (6.3) 式の値の約半分
程度の値となるのは 興味が深い。

またこのように見て来ると ^{同表で} 飛沫なし船型(矩形面)の
抵抗が 平板の約半分となっているのも面白い。

(17.12) は (7.5) の半分とは大分異なるし、(7.6) についても 幾分の
疑念にあるが、いづれにしても 飛沫抵抗は λ と F を決めれば
後は排水量のみで ^{計算} 決まる値と考える事は出来そうである。

一方で $F=1$ 前後では 流阻抵抗はまた "前方" の
圧力分布で 干渉効果による 減少が 期待出来る。

いづれにしても 飛沫なし 船型はやはり 有利なように見えるが
さらに 飛沫あり 船型について 最適化を試みる必要
はあろう。

この時 (7.6) が 正しい ならば "簡潔" であるので
再検討の 要がある。 74リ 今の所 解析的に正しいと
考えられるけれども それを 数値的に 確かめた ものはいない
点に 疑念が 残るのである。

8. 矩形圧力面の極値問題

長さ L , 幅 B の矩形圧力面を

$$p(x, y) = A \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=1}^{\infty} a_{nm} \frac{\cos n\phi}{n \cdot \phi} \sin m\psi \quad (8.1)$$

$$x = -\frac{L}{2} \cos \phi, \quad y = -\frac{B}{2} \cos \psi$$

と表わす。

$$\pi \cdot \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2} = \frac{\pi}{2}$$

$$P \delta V = \iint p dx dy = \frac{\pi^2}{8} LBA a_{01},$$

と表わすから $a_{01} \approx 1$ と仮定して

$$A = \frac{8 P \delta V}{\pi^2 L B} \quad (8.2)$$

抵抗は 造波抵抗 R_w と 飛沫抵抗 R_s の和である。

$$R_T = R_w + R_s, \quad (8.3)$$

$$R_w = \frac{k_0^2}{\pi P U^2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F|^2 \sec^5 \theta d\theta, \quad (8.4)$$

$$F = \iint p(x, y) e^{ik_0(x \cos \theta + y \sin \theta)} \sec^3 \theta dx dy, \quad (8.5)$$

$$R_s = \frac{\pi L}{8 P V^2} \int_{-\frac{B}{2}}^{\frac{B}{2}} \sigma^2(y) dy, \quad (8.6)$$

$$p(y) = A \sum_{m=1}^{\infty} b_m \sin m\psi \quad (8.7)$$

フーリエの条件は

$$b_m = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{n,m}$$

$$\sum_{n=0}^{\infty} a_{n,m} = 0, \quad (8.8)$$

$$\sum_{n=0}^{\infty} a_{2n,m} = - \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n+1,m}, \quad \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{n,m} = 2 \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n,m} \quad (8.9)$$

$$\frac{\pi L^3}{4 F V^2} \times 64 \frac{P^2 g^2 V^2}{\pi^4 L^2 F^2} = \frac{16 W \cdot \delta}{\pi^3 \lambda F^2}$$

No. 25

Date

$$\psi(\varphi) = A \sum_{n=1}^{\infty} |b_n| e^{i n \varphi}, \quad b_n = \sum_{m=0}^{\infty} (-1)^m a_{n+m}, \quad (8.10)$$

$$r_s = \frac{R_s}{W \delta} = \frac{16}{\pi^3 \lambda F^2} \sum_{n, \mu} b_n b_\mu \int_0^\pi \sin n \varphi \sin \mu \varphi \sin \varphi d\varphi \quad (8.11)$$

$$W = \rho g V, \quad \delta = V/L^3, \quad \lambda = B/L, \quad F = V/\sqrt{gL}$$

次に (7.11) の右辺を

$$\begin{aligned} J_n(z) &= \frac{1}{\pi i^n} \int_0^\pi e^{i z \cos \varphi} \cos n \varphi d\varphi \\ &= \frac{z}{\pi i^{n+1}} \int_0^\pi e^{i z \cos \varphi} \sin n \varphi \sin \varphi d\varphi, \end{aligned}$$

と表す。

$$F = \frac{ALB\pi^2}{4} \sum_n \sum_m a_{n,m} i^n J_n(k_0 \sec \theta) \frac{m i^{m+1} J_m(\frac{k_0 B}{2} \sec \theta \sin \theta)}{\frac{k_0 B}{2} \sec \theta \sin \theta}$$

$$= \frac{\pi^2 AL}{2 k_0 \sec \theta \sin \theta} \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} (2m+1) i^{n+2m} a_{n,2m+1} J_n(k_0 \sec \theta) J_{2m+1}(\frac{k_0 B}{2} \sec \theta \sin \theta)$$

$$\begin{aligned} r_W = \frac{R_W}{W \cdot \delta} &= \frac{16}{\pi \lambda^2 F^2} \sum_{n, \nu} \sum_{m, \mu} (2m+1)(2\mu+1) i^{n+2m+\nu+2\mu} a_{n,2m+1} a_{\nu,2\mu+1} \\ &\times \int_0^\pi J_n(k_0 \sec \theta) J_\nu(k_0 \sec \theta) J_{2m+1}(\frac{k_0 B}{2} \sec \theta \sin \theta) J_{2\mu+1}(\frac{k_0 B}{2} \sec \theta \sin \theta) \times \\ &\quad \times \sin \theta \sin^2 \theta d\theta \end{aligned}$$

(8.12)

n, ν は共に even, 又は odd のみ 値を取る。

極値問題は

$$r_T = r_W + r_S$$

について $a_{01} = 1, \quad \sum_{n=0}^{\infty} a_{n,m} = 0$

なる副条件で 係数を決める事となる。

ここで $\nabla = L \cdot B T_E$, T_E : 有効吃水

と定義すると (8.11) から

$$R_S/W \propto \frac{(T_E/L)}{F^2} [\quad]$$

となるが T_E/L に比例する

一方

$$R_W/W \propto \frac{(T_E/L)}{\lambda F^2} [\quad]$$

とるので 造波抵抗は λ が大きくなると小さくなる。

つまり 滑走面としては 吃水が小さく 幅の大きい方が

有利である。